仏教の生活 245

平成26年冬・新年号

母が喜んでくれる生き方

家族への想いが、信仰への入口

稲岡春瑛

一番の幸せ

私は九州の島原という小さな町で生まれた。平成三年に雲仙岳が噴火し大災害が起こった所だ。物心がついた時には父親は病気で亡くなっていて、遺された四人の子供は母が女手一つで育ててくれた。それは五十年近くも昔の、しかも九州の田舎町のことでもあり、母子家庭の生活はつましいものだった。

幼いころは友だちと同じ玩具を買ってくれな

い、休みに遊びに連れて行ってくれないなどと、母を責めた記憶がある。それでも少し大きくなるにつれ、申し訳なさそうな、悲しそうな顔を見るのが辛くて、子供ながらに遠慮して、しだいに何も求めなくなったことを憶えている。

母は自分の物は何一つ買うことはなく、いつもよれよれの服を着ていた。それでも、どう工面したのか、新年には子供たちには晴れ着を買ってくれた。

母の口癖は「あんたたちが嬉しそうな顔してくれるのが一番幸せたい」だった。貧しいながらも明るい母の笑顔は、私の心の支えだった。母にとって子供たちが一番大切だったように、私にとっても母が一番大事だったので、大人になったら親孝行ができる生活をしたいと夢見ていたものだ。

親孝行したいときには

不思議なご縁で私は東京の寺院に嫁いだのだが、毎月墓参りを欠かさず、毎朝夕、仏壇の前で

読経するほど信心深かった母は、このご縁を大変喜んだ。寺の住職であった夫は、私が多くを語らなくても思いを汲み取って、九州から母を呼び寄せて寺に同居することを勧めてくれた。

私はやっと母に親孝行できることを喜び、母も寺での生活を楽しみにしていた。ところがあろうことか、「少しずつ荷物を整理するね」という電話を最後に母は脳内出血で倒れ、言葉も出せず、自分で動くこともできない身体になってしまった。そんな母を一人九州の病院に置いておくわけにもいかず、ストレッチャーのまま飛行機に乗せて東京に搬送したのだった。寝たきりで四年間、寺の離れで自宅介護の後、母は旅立ってしまった。

人生は理不尽だ、不公平だ。頑張った人は報われる、幸せになれる、そう思うからこそ苦労もできる……。そう信じてきたものだが、母は報われないまま人生を終えてしまった。母の人生は何だったのか。何ら報われることなく逝った母が哀れで、一人になると涙に暮れる日々が続いた。

三回忌をまもなく迎えようとする日、一人で涙ぐんでいる私に、突然母の声が聞こえた。「泣いたらつまらんよ。あんたの笑顔が見たかとよ。私のために不幸にならんで……。あんたの幸せだけが私の願いばい」。子供のころ、泣きじゃくる私を満面の笑みであやしてくれたように……。

その声に、今でも母は私を見ている、泣いて生活することを望んではいないのだと気づかされた。私は母が喜んでくれるような生き方をしようと考えた。嬉しい時も辛い時も仏壇に手を合わせていた母の姿を思い出したとき、わたしは僧侶になることを決心した。母が手を合わせ、想いを馳せていた彼方に、何か答えがあるような気がしたのだ。

貧者の一灯

仏教説話に「貧者の一灯」がある。

王が釈迦を説法のために城に招いた。王は釈迦の帰路の暗い足元を照らすために、万灯を施した。村に住む貧しい老婆も、せめて一つだけでもと生

活の糧である山羊を手放して、一灯を求め捧げた。

さて釈迦が城を一歩出たとき一陣の風が吹き、万灯はことごとくかき消されてしまったが、老婆が捧げたたった一つの灯だけが輝き続け、釈迦の足元を明るく照らしていた。

富者が有り余る財力で施した万灯は一陣の風で消されてしまうが、財物など何ひとつない生活の中で、真心を込めて施しをした一灯は消えることはなかったのだ。

毎月墓参りに行くとき、母はいつも小さくたたんだお札を用意していた。何のために大切なお金をお寺に置いていくのか、幼かった私は惜しいような気がしたものだ。しかし母は、そうしてわずかでも布施できることがとても嬉しそうだった。

信仰への入口

子供のころ、母のよれよれの服を恥ずかしく思ったことがある。けれどこの説話にあるように、母は真心を込めて精一杯生きてきた。そんな母を今は誇りに思う。母の一灯は今も輝き続けているだろう。母が手を合わせていたその先には、励まし慰め続けてくれた亡き両親や夫の姿があったに違いない。

「亡き人を思う気持ちは尊いが、それが即ち信仰というわけではない」と先輩僧侶に言われたことがある。たしかにそうだろう。しかし、愛しい家族への想いが、信仰への入口となってもいいはずだ。仏教は苦しみ悲しみながらも、今を精一杯生きる私たちにこそ必要な教えなのだ。先立った大切な方々が喜んでくれて、私たちを誇りに思ってくれるような、そんな生き方こそが仏の教えに沿った生き方だと私は信じたい。

新年を迎えて、懐かしく思い出したい。自分がどう育てられ愛されてきたのかを。「泣かないで。あなたの幸せだけが私の願いです」という、姿なき声を受け取って欲しい。

年の初め、すべての人にとって幸せな年となるようにと願ってくださっている方々の想いを、改めて確認したいものだ。